

靖国、歴史認識について思うこと

植 田 渥 雄

この一、二年、日中関係が何やらギクシヤクしている。この原因は何なのか。領土問題、海底資源開発問題、日本の国連常任理事国入り問題、台湾をめぐる問題等々さまざまな問題が考えられるが、これらの問題を解決する糸口を妨げているのが靖国問題である。

この問題に関する中国側の言い分は次のようなものだ。侵略戦争を指導した A 級戦犯を祭っている靖国神社に日本を代表する立場にある人物が参拝することは、戦争の被害者である中国人の国民感情を著しく傷つけるものであるから、やめて欲しい。

これに対して小泉首相の言い分は、靖国に参拝するのは戦没者の霊を慰め、不戦の誓いを新たにすため、かつての戦争を肯定する意図はまったくないし、ましてや中国を敵視する意図は毛頭ない。にもかかわらず、一国の首相のこのような行動を阻止しようとするところこそ内政干渉に値するものだ、というものである。これはおそらく小泉首相の本心であろう。小泉氏にかつての侵略戦争を肯定する意思があるとは思えないし、中国を敵視する意図があるとも思えない。首相を取り巻く一部の人たちに仮にそのような意図があったとしても、そのことが日本の国益にかなうものでないというぐらいのことは、首相自身がよく知っているはずである。しかし中国側は

そうは受け取らない。小泉氏の意思がどうであれ、一国の最高指導者が戦争犯罪人を祭っている神社に参拝することは、甚大な戦争被害を受けた中国人の国民感情として許せない、というわけである。

マスコミを通じて見る限り、両者の主張は平行線を辿るばかりで、このままでは当分解決の糸口が見つかりそうにない。この問題に関する中国側の主張はここ数十年来首尾一貫して、妥協の余地はないように思われる。一方小泉首相の主張も終始変わらず、これまた妥協の余地があるようには思えない。このままの状態が長く続けば、両国の間にわだかまる重要案件が次々に先送りされ、国民相互の感情的な対立が先鋭化して、危機的状況をもたらさないとも限らない。仮にそこまでに至らないとしても、21世紀日中間最大の課題である地球環境問題の解決も後手に回ること必定である。何はともあれ早期解決が望まれるゆえんである。

さてそのこととは別に、最近の小泉首相の発言には気になることがいくつかある。そのひとつはやはり A 級戦犯の問題である。最近、かつての東京裁判そのものを否定する論議が横行しているが、表面的にみる限り、小泉首相がこの論議に加担しているとは思えない。この問題に関する国会答弁で、小泉首相は「罪を憎んで人を憎まず」という格言を引用して、A 級戦犯の

過去の罪を認めた上で、しかもなお自らの靖国参拝を正当化しようとした。A級戦犯であろうと何であろうと、死んでしまえばみな英霊であり、死者に鞭打つようなことはすべきでない、と言いたかったのだと思う。この格言は私も何度も耳にしたことがあるが、決して嫌いな言葉ではない。日本人の心情にぴったり合った言葉で、小泉首相のお好きな歌舞伎のセリフにもあるようだ。歌舞伎に限らず、テレビの時代劇などでもよく耳にする。誰が言い出した言葉か定かではないが、江戸時代から日本人に親しまれた文句であったようだ。これはまた、あらゆる罪けがれをお祓いによって水に流すという、日本神道の精神にも通ずるものだが、しかしこの格言を靖国神社に結びつけるのは如何なものか。

確か昨年のことだったと思うが、小沢一郎氏がテレビのインタビューで靖国参拝について意見を求められた折、次のように答えていた。それは、靖国神社は、戊辰戦争のとき官軍方として戦って犠牲になった将兵を祭るために建てられた東京招魂社に始まるもので、幕府方は対象外だった。自分は岩手県出身で、幕府方についての賊軍の子孫だから、たとえ総理になっても参拝しない、というものだった。政治家としての小沢氏を私は必ずしも全面的に支持するものではないが、氏のこの言葉は傾聴に値する。それは、靖国神社が、あらゆる罪けがれをお祓いによって水に流すという、日本神道本来のものとはやや趣を異にした神社であることを物語っているからである。はっきり言ってしまえば、靖国神社は、その設立の目的が、明治政府の正統性を内外に誇示するという、極めてイデオロギー色の強いものであったということではないだろうか。もし小泉首相の言うよう

に「罪を憎んで人を憎まず」という精神のもとに建てられたものであるならば、当然幕府方も祭られたはずである。そのみか、江戸城無血開城の一方の立役者となった西郷隆盛さえも、西南戦争では逆賊となって命を絶ったために、祭られていないのである。これとは対照的に、徳川幕府は日光東照宮に敵方の豊臣秀吉をちゃんと祭っている。幕府には敗者方の怨念を鎮めるという政治的配慮があったと思われるが、私は祖父の代からの神道信者の一人として、むしろこちらの方に日本精神を感じるものである。敗者の怨念を鎮めるということが、口で言うほど簡単なことでないことは、歴史の証明するところでもある。徳川幕府はそれを見事にやってのけることによって、二百数十年にわたる平和を手に入れたのである。

これはある意味では歴史認識の問題であろうかと思う。戦後数十年の友好の歴史を無視するかのような極端な反日教育も含めて、中国側が一方的に押し付けてくるかに見える歴史認識論には辟易するほかはないが、日本人は日本人としての歴史認識をもう少し明確にする必要があるのではないだろうか。

それからもうひとつ気になることがある。小泉首相は例の国会答弁で「罪を憎んで人を憎まず」を孔子の言葉だと言って引用していたが、孔子の言行を記した文献のどこを探してもこの文句は見当たらない。それとは逆に『論語』には孔子の言葉として「ただ仁者はよく人を好み、よく人を悪む」（里仁篇）とある。正邪の理と好悪の情を一致させ、それを「孝」を主体とした家族的秩序の中で貫くこと、これこそが孔子の思想の根幹である。「人は死んでしまえば善

も悪もなくなる」というようなことを孔子が言うわけがないのである。但し似たような言葉が中国の古い文献にないわけではない。孔子八代目の子孫である孔鮒こうぶが著したとされる『孔叢子』に孔子の言葉として「その意を悪にくんでその人を悪にくまず」というのを挙げています。しかしこれは人を裁く立場にあるものの心得を述べたもので、訴状の意味内容をろくに吟味もしないで、むやみやたらに人を処刑する為政者の悪弊を戒めたものである。「死んだら罪もけがれもなくなる」という俗流の日本神道的発想とはもちろん無縁である。しかもこの書物は後世の偽作とされているもので、儒学の世界でその権威を認められたものではない。一見、語呂は似ているが、これが「罪を憎んで人を憎まず」の典拠であるかどうかは明らかではない。

以上、揚げ足取りと見られるかもしれないが、日本国を代表する総理の、デリケートな現在の日中関係を意識した上での発言である以上、言葉には細心の注意を払って然るべきである。ましてや孔子は中国人の誰もが誇りとする世界四大聖人の一人である。口がすべったでは済まされない。

2005・5・26 記

[付記]この稿を終えた一ヵ月後に、天皇皇后両陛下がサイパン島に戦没者慰霊の旅に出かけられたことをテレビの報道で知った。恥ずかしながらこれは私にとって、ある意味でショッキングなニュースであった。両陛下は日本軍戦没兵士のみならず、最後まで皇軍の力を信じて犠牲となった日本本土の民間人、沖縄県民、現地の人々、韓国の人々、さらには敵方として戦った米軍兵士の霊までも慰められたのである。「おきなわの塔」「太平洋韓国人追念平和塔」については前もって公表することなく密かに参拝された両陛下の心情を、小泉首相はどう受けとめたのであろうか。物事を論理的に考えることをしない小泉氏や、威勢のよい議論で国民を煙に巻いて粹がっている一部の政治家、評論家諸氏には何を言っても無駄かもしれないが、平和を願う日本国民の一人として、胸にこみ上げるものを禁じ得ない。

2005・6・29